

学園将来構想を実現させる

神田一ツ橋キャンパス集中化

「教育の質を保証し学生と文化を創造していく」

廣瀬 貴博

(共立女子大学 総合企画室)

一 共立女子学園の沿革

共立女子学園は明治一九(一八八六)年、先覚者三四人が発起人となり、女性に専門的知識と高度な技能を修得させ、女性の自主性と社会的自立の育成を目的として創設された。「共立」という校名は、この「共同設立」に由来している。

今年で創立一二二年目を迎え、歴史と伝統、実績を踏まえ、新しい女子教育のあり方を求め、「高い知性・教養と技能を備え、内外に広い視野をもち、個性を発揮して社会

に自立して活躍できる女性」、「温かく思いやり深い心をもち、品位高く、人間性豊かに家庭や社会に貢献できる女性」の育成に総力をあげて取り組んでいる。

二 学園将来構想の策定に向けて

学園では一九九〇年代半ば頃から、学園将来構想の策定が重要なテーマとなっていた。その理由としては、今後長期的に一八歳人口が減少し入学生の確保が困難になっていくことが予想されたこと、また、永続維持を図るためには、

財政基盤の安定性を確保しつつ、教育活動の充実・教育の質の保証をしていくことが必要であったためである。

このことを踏まえ、過去・現在・将来の総合的な分析のもと、二〇〇三年一月、「二一世紀における共立女子学園の将来構想」(以降、学園将来構想)を打ち出した。その柱として以下の四つを掲げた。

- ①教育組織の再編
- ②教育課程の編成
- ③教育方法の改善
- ④校舎等の有効利用

①教育組織の再編について

各学部・学科の独自性を確立するために、競合関係は是正するとともに、現有組織を最大限に活用しつつ、学際化や新たな領域設定による教育内容の充実がテーマとなった。加えて、定員規模の合理化・適正化も視野に入れて検討を行った。

その結果、二〇〇七年四月より全学部・学科の大幅な改組再編を実施した。

○家政学部は、生活美術学科を建築・デザイン学科に改組、児童学科を新設。既存の被服学科と食物栄養学科

と合わせて四学科体制とした。

○文芸学部は、学科を文芸学科の一学科に集約し、七コースを設けた。

○国際文化学部は、社会科学系の要素を取り入れ国際学部として新しくスタートした。

○生活科学科は、情報メディアコースを生活環境情報コースに変更した。

○文科第一部は、文科に名称変更し専攻分離を廃止し、日本語・日本文学コース、英語・英米文学コース、心理学コースの三コース制とした。文科第二部は学生募集を停止した。

また、これらに先がけて、二〇〇四年度より短期大学に看護学科を開設し、新たな教育分野を開拓した。

②教育課程の編成について

専門教育と教養教育が有機的な連携を図るように教育課程の見直しが行われた。これを受けて、二〇〇七年四月より「教養教育の全学共通化と教育課程のくさび型編成」を実施した。

これまで教養教育科目は、学部・学科のそれぞれのやり方により運用されていたが、具体的な教育目標を設定し、教育課程を統合することで教育の質を確保するとともに、

学生への多様な教育の提供を目指した。また、教養教育科目の高年次履修と専門教育の低年次履修を可能にした。

③教育方法の改善について

多様な学生の能力に応じた適切な教育の実施、教育の改善活動がテーマとなった。FDの積極的な推進や教育活動の評価の実施、その他シラバスや履修指導体制の充実など特色ある教育方法の実施が検討された。二〇〇六年四月に導入した「共立シラバス」は、授業科目、クラス名、開講期、単位数、授業担当者等の基本情報に加え、単位制度の実質化を担保すべく、授業の目標と内容、事前学習・事後学習の指示、履修上のアドバイス、成績評価基準と評価の方法、テキスト、参考文献などの情報を盛り込んでいる。

④校舎等の有効利用について

学生生活における満足度をより一層高めることがテーマとなった。学生個人の希望に合わせて科目選択の自由度の拡大、先輩・後輩、他学部・学科との交流や教職員とのコミュニケーションの増加、課外活動や都心を中心とした就職活動の活性化等が検討された。これらの要素に加えて、学園将来構想を実現させるためには、一つのキャンパスにヒト・モノ・カネ・情報などの資源を集中させることが必要条件となった。

これを実現するために、これまで家政学部・文芸学部の一・二年次及び国際文化学部(一～四年次)は八王子キャンパスで、家政学部・文芸学部の三・四年次及び短期大学は神田一ツ橋キャンパスで授業を行っていたが、全学部・学科、全年次の学生を一つのキャンパスに集約すべく「神田一ツ橋キャンパス集中化計画」がスタートした(八王子キャンパスの運動場・体育館・一部実験・実習施設は維持)。

三 神田一ツ橋キャンパス集中化にあたって

神田一ツ橋キャンパス集中化を実行するにあたり、最も意識したことはステークホルダーへの対応である。

まず学内の教職員に対しては、学園将来構想が教育機関として存続していく重要施策であること、またそのために集中化計画が必要であることを、説明会や勉強会の実施、学園報等学内の広報物により周知し意思統一を徹底した。このことにより、当事者意識が高まっただけでなく、危機感の醸成、モチベーションの向上へと繋がった。学内体制を磐石にした後に、学生・保護者をはじめとする学外への広報を開始した。

学生に対しては、学内報を送付した。回を重ねて詳細な

内容を伝達し、保護者に対しても別途学内報を送付した。集中化計画に対する学生・保護者の反響について、否定的な意見が出ることも予想されたが、大多数が応援や喜びなどの肯定的な意見であったことは、教職員にとって大変励

神田一ツ橋キャンパス集中化計画
国際文化学部の場合

≪当初計画≫

2006年度入学の1年生は神田一ツ橋キャンパス。
順次年度進行。
2009年度集中化計画完了。

	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
1年生	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋
2年生	八王子	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋
3年生	八王子	八王子	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋
4年生	八王子	八王子	八王子	八王子	神田一ツ橋



≪変更後計画≫

2006年度入学の1年生は神田一ツ橋キャンパス。
2007年度全学年が神田一ツ橋キャンパス。
2007年度集中化計画完了。

	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
1年生	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋
2年生	八王子	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋
3年生	八王子	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋
4年生	八王子	八王子	神田一ツ橋	神田一ツ橋	神田一ツ橋

みとなり、強い追い風となった。しかし、集中化計画の全てが順調に進んだわけではなかった。当初は、二〇〇六年度入学より順次年度進行していた王子キャンパスに通学していた国際文化学部については、二〇〇九年度に集中化計画を完了する予定であった(図表参照)。

この計画に対し、国際文化学部の学生から神田一ツ橋キャンパスでの授業を早期に望む声上がり、署名嘆願書が提出された。また、保護者からも多数の問い合わせを頂いた。学園としては、早期に解決すべき重要課題としての認識のもと、講義室をはじめとする教育環境整備はもとより、カリキュラムなどのソフト面の対応等、必要な要素を慎重に検討していった。そして、国際文化学部の二年次・三年次の全学生、休学の学生、留年の可能性のある学生、海外留学中の学生に、二〇〇七年度から神田一ツ橋キャンパスでの授業を希望するかの意向調査を行った。その結果、九割以上の学生が早期移転を希望していることがわかった。ただ、学園方針は、あくまでも早期移転に反対する学生・保護者を一人として残すことなく、全員の賛成が得られ

た場合に限り早期移転の決断をすることであったので、このとき希望しないと答えた学生に対しては一人ひとり面談し、理由を確認し、移転の趣旨の説明と誤解を取り除いていった。十分な話し合いと細かい対応の結果、最終的には全員からの賛同を得ることが出来た。

学生は大学にとって最も重要なステークホルダーであり、教職員は計画を進行する上で以下の事由を基本として対応した。

- 学生の意向を学園の方針に充分に反映させ、尊重すること。
- 決定の経緯や理由も明確に説明すること。
- 集中化による新しい方針やルール、その効果等を詳細に明示すること。

学園の都合を優先させ反発を招くことの無いよう、全学生・保護者の理解を得て計画を進めていった。広報活動体制は以下の順に従って行った。

- 第一段階…教職員
- 第二段階…在学生・保護者
- 第三段階…学内関連団体(卒業生団体(櫻友会)、後援会、取引業者)

第四段階…学外関連団体(近隣、行政、他大学、交通機関等)、卒業生、一般公表

四 集中化初年度の課題と対応

集中化計画に連動してキャンパスリニューアル計画を実施した。その一環として、生活環境の改善のため本館食堂スペースの拡大、三号館食堂の増設、学生ラウンジの座席数の増加等も行った。それでも、集中化初年度はいくつかの課題が浮かび上がった。

ひとつは、キャンパスに通う学生が急激に増えたことで、キャンパス内の人口密度が格段に高まったことである。特に、ロビー、エレベーター、食堂などは想像以上に混雑した。「エレベーターの待ち時間が長い」「エレベーターが混雑して大変」「食堂が満席で座れない」「離れた教室へ移動する時間が足りない」など、様々な意見が上がってきた。

学園は、学生がキャンパスライフを快適に過ごすために何をすべきかを実質的に検討するために、学生と直接コミュニケーションを交わし意見交換をする場を創設した。これは「キャンパスリメイクプロジェクト」といい、各学部・学科を代表する数名の学生に、問題点や改善点をその

他多くの学生からヒアリングしてもらい、その結果をプロジェクトでディスカッションする仕組みだ。なお、プロジェクトの名称は、学生自らの手で大学を創造してほしい、学生が大学をリメイクするという意味で名付けられた。忌憚の無い意見を交し合える様、精力的かつ丁寧に活動し、学生と議論していった。こうした議論に基づいて、即実現可能なこと、時間を要すること、できないことを整理し、その一つひとつを学生が理解・納得できるように説明し、実践可能なものは即座に実践した。

例えば、エレベーターの運行改善は重要な課題の一つであった。エレベーター会社から現状分析と様々な提案してもらい、キャンパスリメイクプロジェクトで何度も打ち合わせを重ねた。「エレベーターをどうすることが、今出来る最もよい方法か」「学生は、いつ、どんなとき、何のためにエレベーターを使うのか」といった意見交換を行い、学生生活の足となるエレベーターを一から考え直した。エレベーターの停止階を奇数階・偶数階に分ける場合、高層階・低層階に分ける場合等、数多くの方法があり、その全てについてシミュレーションに基づき分析した。その結果、現段階での最善の方法として以下のような運行を開始した。

○中央エレベーターを全機ステップ運転とし、多くの学生が利用する講義室、演習室のフロアに停止させ、上下一〜二階の移動は原則として階段を利用。

○特に、低層階については階段を利用。

○各階停止運転する非常用エレベーターは、階段の利用ができない利用者（怪我、病気等の方）を優先。

その他、授業時間割の設定変更として、授業間休憩を二〇分、昼休憩を六〇分確保し、建物間の移動を考慮した時間割編成にした。また、快適な食事空間の提供として、食堂の営業時間の拡大、売店の充実、食堂以外で食事が出来るスペースを確保した。

学園は、こういった決定後の新ルールを周知するにあたり、それが単なる「情報の伝達」になることがないよう、キャンパスリメイクプロジェクトで説明、入学生説明会の開催、在学生宛に文章で送付等、様々な手段を用い十分な情報開示と説明責任を果たした。こうした対応が、学生の理解や協力、エレベーターの混雑の大幅な緩和に繋がっただけでなく、混雑時には、自主的にエレベーター前のロビーに整列するといった、ルール・マナーを生み出した。さらに、学生の自発的な行動によって生まれたルール・マナーが、学内のルール・マナーとして定着し、他校舎へと伝播

していった。

狭隘化したキャンパスというマイナスとされたことが、先輩や後輩、友達と顔を合わせる機会が増え、学生間のコミュニケーションが活発になるといったプラスの作用も引き出した。また、学生自らの手で大学生活を向上させていく仕組みづくりにも繋がった。

キャンパス集中化によって起きた問題を解消するもう一つの方法は、ICTの活用だ。共立女子大学・短期大学教育ネットワークシステム「kyonet」の導入である。

「kyonet」導入の目的の一つは、教育効果の向上であった。多様化する学生に対し、組織として学生と「One to One」の関係の構築を目指した。個別に対応できるシステムをつくり、きめ細かい教育による更なる教育効果の向上を図った。

もう一つは、学生の分散化であった。これまでのように学生が学内掲示板で情報を取得したり、窓口に来て相談する方法だけだと、掲示板や窓口で学生が集中し混雑してしまう。そこで、学生が登校することなく全てWebを介して情報を取得できるようにした。具体的には、休講や教室の変更、履修登録、成績のチェック、資格申請、住所変更申請、レポートの提出、授業資料の入手などが可能となっ



た。また、授業資料を配布したり、学生から提出されたレポートへの採点結果を返したり、学生からの質問に個別に回答することも可能であり、これらは携帯電話でも活用で

きるようにした。

ICTによる学生支援体制を構築したことで、単に掲示板や窓口の混雑が緩和しただけでなく、システムを通した無駄のない情報活用の体制により、相談のある学生を絞り込み、ゆっくりと時間をかけて相談にのることができた。

五 次期学園将来構想へ向けて

二〇〇六年度より段階的に始まった神田一ツ橋キャンパスにおける集中型教育は、二〇〇七年度、大学・短期大学の全学部・学科において完成した。入試状況を見ると、志願者数が増加し、学生確保の安定感が増した。一連の改革が、大学・短期大学の学生に受け入れられ、学生と共に大学文化を創造し継承していく体制が出来上がった。

しかし、これを学園将来構想の最終的な「成果」だとは捉えていない。学生が卒業した後、大学に対して高い満足感やロイヤリティを持ってこそ成果だと言える。学園はこの将来構想の実現を「次期学園将来構想」の布石であり、都心型の新しい教育ステージで教育・研究・社会貢献をしていく基盤の構築と認識している。

今後は、国の政策等の趣旨を踏まえ、現代社会において

求められる人材養成ニーズを把握しつつ、人材養成像・教育理念・目的等について再確認していく。その際には「学習成果」重視の観点から、本学の建学の精神に即してこれをどのように達成していくか検討すると共に、学生が入学してから卒業するまでにどのような能力を習得するのか、明確かつ具体的に表す。また、人材養成像・教育理念・目的等と整合性・一貫性を持った体系的な教育課程の編成や、それと連動したシラバスの充実も図っていく。さらに、教育活動におけるPDCAサイクルを確立し、恒常的に教育活動の充実・発展に努め、その内容を社会に対して積極的に情報開示し、説明責任を果たしていく。その他、教育力の充実・質の保証に関する多様な仕組みを構築する。永続的に教育の質を保証していくことが教育機関の使命であり、責務である。集中化した神田一ツ橋キャンパスの地から次期学園将来構想を発信し、学生と全教職員と共に検討を重ねていきたい。